【書き下し及び注】

浄土十勝箋節論巻上

不説現益勝　初紙
順次得脱勝　六紙
広長舌相勝　八紙
証誠現益勝　十一紙
不誨現益勝　二十六紙
法滅利物勝　二十八紙
三時不代勝　三十紙
執著解脱勝　三十二紙
行徳遮悪勝　三十四紙
一代遍勧勝　三十七紙
依経直説勝　三十八紙
超世本願勝　四十二紙
称名音声勝　四十三紙

巻第五章目

浄土十勝箋節論巻上

坤中

菩薩大乗比丘澄円撰

不説現益勝 第十七

夫れ、須臾聞之究竟菩提の者、是れ一乗円経の所談、乃至一生或成正覚は、迺ち三密行者の期心なり。然りと雖も法性は難顕の理なるが故に之れを顕わすに若干の劫波を送り、無明は難断の惑なるが故に之れを断ずるに爾許の時節を歴(へ)る。抑(そもそも)未だ相似鉄輪の位に登らざるの爾前には、必ず界内流転の果報を受くるなり。所以に、如来慈父、或いは転輪釈王の妄報を挙げて且く円頓行者の心を慰め、或いは大梵王宮の快楽を讃えて、仮りに密乗行人の思いを誘う。若し之れを以て之れを言わば、聖道の衆典は、是れ半字教か。浄土の三部は乃ち満字教か。智人知んぬべし。

請い問う。曰く、聖道の諸経には、猶(なお)如電光の妄果を雑説し、浄土の一教には湛然常住の大楽を純揚す。夫れ純雑の二門、已に各別なれば、権実の二義、亦た判然たり。所以に今、権を呼びて半とし、実を歎じて満と為るのみ。

問うて曰く、小乗には九部を説くが故に是れ半字教なり。大乗には十二を明かすが故に満字教なり。円密の二経、既に広く十二分教を挙ぐ。若し爾らば、焉ぞ半字と言わんや。

答えて曰く、一往は然なり。二往は然らず。小教の修多羅、亦た十二を明かすとも未だ拙度を出でず。大乗の法本、亦た九部を宣ぶれども、猶お是れ衍門なり。然れば則ち、教法の半満を詳らかにすること、未だ必ずしも分教の多少には由らず。肆(かるがゆえ)に所演の法門の高卑に約して、以て牟尼遺法の半満を論ずるのみ。智者自ら知れ。

問うて曰く、今親たり二悉兼説の明文を見て、直ちに両門摂化の純雑を知らん。伏して請う。諸経の誠説を載せて、以て委細に其の義相を顕示せよ。

答えて曰く、或いは是の『法華経』を聴き、至乃、「若しは復た人有りて講法の処に於て坐せんに、更に人有りて来たらば勧めて坐して聴かせしめよ。若し座を分かち坐せしむれば、是の人の功徳、身を転じて帝釈の坐処、若しは梵天王の坐処、若しは転輪聖王の

所坐の処を得」[1]と説き、或いは「若生人天中受勝妙楽」[2]とも宣べ、又た「若し人有りて受持読誦して其の義趣を解すれば、是の人、命終して千仏の為に手を授けられて恐怖せざらしめ、悪趣に堕せず、即ち兜率天上の弥勒菩薩の所(みもと)に往く」[3]と讃す。又た「若し但々書写せば、是の人命終して当に忉利天上に生ずべし。是の時、八万四千の天女、衆(もろもろ)の伎楽を作して之れを来迎す」[4]とも説けり[已上]と。

又た解釈の中に「若し但だ書写すれば当に忉利に生ずべし、五法師を具すれば次に都率に在る」とも云える、即ち此の意なり。

次に密乗行者の華報の益を挙ぐとして「若し仙楽を得、及び極楽界知足天宮に往かんと欲せば、処に随いて、意、便ち得」と。

又た『菩提心論』に云く「常に人天の中に在りて勝快楽を受く」[5]と。

又た『毘盧遮那経の疏』に曰く、[6]

此の中に悉地宮と言うは上中下あり。上は謂く密厳仏国、三界を出過して二乗は見聞することを得る所に非ず。中は謂く

(1)『法華経』(正蔵九・四七上)。
(2)『法華経』(正蔵九・三五上)。
(3)『法華経』(正蔵九・六一下)。
(4)『法華経』(正蔵九・六一下)。
(5)不空訳『菩提心論』(正蔵三二・五七下)。
(6)一行訳『大毘盧遮那成仏経疏』(正蔵三九・六〇八上)。

十万の浄厳、下は謂く諸天修羅宮等なり。若し行者、三品持明仙と成る時、是の如きの悉地宮の中に安住す、と。

又た『同疏』に曰く、(7)

未だ法身地を得ざる者は、世世の生所に常に人中天上に在りて、障を離し、見仏聞法することを得已上と。

原(たずぬ)れば夫れ、有為の快楽は電光朝露の如く、顛倒の果報は夢幻泡影に似たり。彼の大梵高台の深禅の楽も終に退没の苦を遁れず。忉利喜見の勝妙の報も定んで五衰の非を免れ難し。凡そ人間の妄楽は、全く仏道の資けに非ず。天上の幻報も更に得脱の因に非ず。然れば則ち、如来慈父も菩薩大師も処処説法の場に於て人天受生の身を呵したまえり。

嗚呼(ああ)痛いかな、辱しきかな。鵠鶴を刻んで鶩(あひる)に類し、虎竜を画いて狗(いぬ)と為んこと、豈に道人の傷磋に非ずや。慎しむべし、慎しむべし。

又た『正法念経』の偈に曰く、(8)

智者は常に憂いを懐くこと獄中の囚の如く、愚人は常に歓楽

(7) 一行訳『大毘盧遮那成仏経疏』（正蔵三九・六九二中）。

(8)『往生要集』（正蔵八四・三九中～下）に同文あり。

すること猶し光音天の如し已上と。

又た竜樹大士の偈に曰く、(9)

是の身は不浄九孔より流れて、窮め已ること有ること無きこと河海の若し。薄皮覆蔽して清浄なるに似たれども、猶お瓔珞を仮て自ら荘厳せり。諸の有智の人乃ち分別して、其の虚誑を知りて便ち棄捨つ。譬えば疥ある者の猛焔に近づくに、初めには暫く悦しと雖も、後には苦を増すが如し。貪欲の想も亦復た然なり。始めは楽著すと雖も、終に患い多し。利衰の八法能く免がるること莫し。若し除断すること有るは真に匹無し。未来の大苦をば唯だ身のみ受く已上と。

馬鳴菩薩の頼吒和羅伎の声に唱えて云く、

有為の諸法は幻の如く化の如し。三界の獄縛は一つとして楽しむべき無し。王位高く顕れて勢力自在なるも無常既に至れば誰か存者を得ん。空中の雲の須臾に散滅するが如く、是の身の虚偽なること猶おし芭蕉の如し。怨たり賊たり、親近すべからざること、毒蛇の篋のごとし。誰か当に愛楽せん。是

(9)『龍樹菩薩為禅陀迦王説法要偈』（正蔵三二・七四五下）。

の故に諸仏常に此の身を呵したまう已上と。

又た堅牢比丘の壁上の偈に曰く、

身は臭きこと死屍の如し。九孔より不浄を流す。厠虫の糞を楽しむが如く、愚にして身を貪るも異なること無し。憶想して妄りに分別するに即ち是れ五欲の本なり。至乃、邪念より貪著を生じ、貪著より煩悩を生ず已上と。

又た『宝積経』に曰く、

罪の身は深く畏るべし。此れ即ち是れ怨家なり。無識耽欲の人、愚痴にして常に是の如き臭穢の身を保護すること、猶おし朽ちたる城郭の如し。曰夜煩悩に逼られて遷流して暫くも停まること無し。身は城、骨は墻壁（しょうへき）、血肉は塗泥を作して、画彩は貪瞋痴、処に随いて荘飾せり。骨身の城、血肉相い連合することを悪（にく）むべし。已上人間

『正法念経』に曰く、

天上より退せんと欲する時、心に大苦悩を生ず。地獄の衆の苦毒、十六にして一に及ばず已上と。

又た竜猛菩薩、禅陀迦王を勧発する偈に曰く、

梵天離欲の娯を受くと雖も、還りて無間熾燃の苦に堕つ。天宮に居して光明を具すと雖も、後には地獄黒闇の中に入る已上

と。

夫れ此の如く、人天有為の妄報を呵したまうこと且千万端なり。縷説するに遑あらず。凡そ円密二教の中に於て、且く人天有漏の快楽を挙げて、仮りに行者一分の悉地と為ること、是れ如来の素意とやせん。将た大聖の非懐なりとやせん。高識の人自ら思察せよ。又た、此の如く如来非本懐の人天の果報を雑説せるの経教を以て、随自元意の経王とせんや、随自他意の権教とせんや。智人之を勘判せよ。

抑円密二経の中に、随他人天の果報を挙げて且く中下の行者の耎心を慰むることは、是れ則ち円理密事、難解難入にして、生死を截断すること甚だ難しきが故に、耎弱の機情に附順して、仮りに人天の快楽を讃する者なり。此の一段、専ら高智卓抜の人に対して、以て覿面に手脚し、親たり酬酢して直ちに雌雄を決すべ

し。原ぬるに夫れ、聖道の衆典の中に二悉を明かすことは、譬えば薫蕕器を一にして梟鸞翼を接えたるが如し。智者の胸中、其れ奈何。

抑案ずるに、吾が西方浄土の教文は、若しは正依の三経一論の中にまれ、若しは傍依の洪経大論の文にまれ。未だ曽て安養の行者の上に於て、順次巳後の人中天上の浮萃の妄楽を説かず。直だちに臨命終時乗宝金台の実益の相貌を明かせり。此れ即ち一代不共の秘典、諸仏絶離の教益なり。

凡そ説教の権実を定判するに、多途の義門有るべし。或いは、説くべきを説かざるを以て権教とするの義有り。謂く、「遍尋法華以前諸教実無二乗作仏の文、及び、明如来久成の説、故知並由帯方便故」[10]とも釈し、又た「二乗作仏始自今教」[11]とも判ずるは、是れ、説くべきを説かざるが故に、爾前の諸教を以て束ねて権教に属するなり。或いは、説くべからざるを説くを以て権門とするの義あり。謂く、華厳に一別を兼ねて方等に四教を並し、般若に通別を帯する等は、是れ、説くべからざるを説くが故に四味の諸

(10) 湛然『止観輔行傳弘決』（正蔵四六・三四五上）。
(11) 『法華文句』（正蔵三四・四七中）。

経を以て総じて権教と名づくるなり。彼れに準じて之れを思うに、夫れ、人天の果報は妄染の快楽なり。如来の本懐は成仏の高位なり。

天台大師判じて云く、[12]「三乗根性のみ仏出世を感ず。余は感ずること能わずとは、蓋し此の謂いなり。

又た、『疏』の三に曰く、[13]

諸仏出世して種種の方便をもて、衆生を勧化したまえることは、直に制悪修福して人　天の楽を受けしめんと欲するにあらず。人天の楽は、猶し電光の如し。須臾に即ち捨てて還りて三悪にいりて長時に苦を受く。此の因縁によりて但だ勧めて即ち浄土に生ぜんことを求めしめ、無上菩提に向かわしむ。是の故に今時の有縁、相い勧めて誓いて浄土に生せば、即ち諸仏本願の意に称う已上と。

然るに今、円密大教の中に、仮に人天の果報を挙げて、下根の行者を将護すること、豈に是れ、如来長者の本懐ならんや。只だ是れ随他赴機の権説なるのみ。学者思択せよ。已に説くべからざ

(12)『法華文句』（正蔵三四・四下）。
(13) 善導『観経疏』（浄全二・四〇上）。

る浮華妄染の小果を説くが故に、猶お、未だ権教の閾域を出でざるものか。然るに西方の一文に於ては、全く諸仏の本懐にあらざる人天の小報を説かず、直ちに、当坐道場生諸仏家の大果のみを明かすが故に、専ら是れ頓大教の中の了教なり。衆釈典の中の経王なることを。所以に、或いは了中の了とも判じ、又た、頓中の頓とも釈するものなり。夫れ、孰れの説経にか人天の近報を挙げて以て耎弱の行人を慰めざる有るや。何れの教文にか釈梵の快楽を褒めて以て懈緩の修者を誘らえざることあるや。爰に今此の弘願妙典に至りては、全く其の義無し。何と言うぞや。所讃の弥陀、已に順次引接の大願を発したまう。故に、能讃の釈迦、亦た、順次順後の華報を挙げたまわざるなり。此れ即ち、諸教絶離の墳籍、円密不及の秘談なり。若し爾らば、行者等匪石の信心を堅むべし。夫れ以れば、顕密衆典の中に、兼ねて現益を雑ぜることは、両菓の簣を同じうするが如く、浄土一教の文に、唯だ当利を明かすことは、鳳凰の独翔に似たり。行人、早く迦羅鎮頭の簣を捨てて、瑞鸞竒鳳の法を翫(もてあそ)ぶべし。

『出曜経』第二に云く、[14]

是の身は久しからず、還りて地に帰す。神識已に離すれば骨

骭独り存すと。

『大悲経』に曰く、[15]

仏、阿難に告ぐ。若し衆生ありて仏名を聞く者は、我が説く

是の人は畢定して当に般涅槃に入ることを得べしと。

南無阿弥陀仏。

順次得脱勝 第十八

夫れ開示悟入仏之知見とは、是れ、如来出現の本懐居。「父母所生身速証大覚位」[16]は迺ち遮那行者の所期なり。然るに上根上智の人は一生十地一生妙覚の高位に登るべしと雖も、中根下機の輩は久遠下種王城得脱の一類無きにあらず。抑も、円乗の行者に頓漸の二機有るが如く、又た、密行の人にも大小の不同有り。謂く疏に三品の悉地を挙げ、論に人天の果報を明かせる等は、即ち此の意なり。

(14) 竺仏念訳『出曜経』（正蔵四・六二三下）。

(15) 出典未詳。『往生要集』（正蔵八四・七三上）に同文あり。

(16) 『菩提心論』（正蔵三二・五七四下）。

且く真言問答に曰く、[17]

今の如く真言の行者、此の如く観修するに、幾くの生にか成仏するや。対う。一生二生、機に随いて不定なりと已上。

異本の『即身義』に云く、[18]

問う。大機(利機)小機(鈍機)共に此の教を修せば二つ共に即身成仏するや。答う。今の意は、大機は即身成仏し、小機は後の十六生に成仏すと云うべしと。乃至広説 夫れ、円密大乗教の本意を温ぬるに、教法に於ては頓極頓足の玄旨を示すと雖も機根に至りては必ず利鈍大小の不同あり。故に成仏得道の劫波に遅疾の差降有るは全く是れ教法の失にはあらざるか。但し、機根の遅鈍を捨つるをば教行の過とも謂いつべし。又た、頓教の妙行に能わざるをば根縁の失とも名づくべし。然れば則ち機根の劫波を送るは即ち法に漸教を明かすに成んぬ。若し、機教の二は倶に順後不定に至るの義に有らば焉ぞ頓教頓機と名づくべけんや。

円密卓然の学者、自ら商量せよ。夫れ連持修行の彙(たぐい)は、尚お劫

(17) 異本『即身成仏義』、出典未詳。
(18) 異本『即身成仏義』、出典未詳。

波を送るの義有り。矧や退大沈落の人に於てをや。於戯(ああ)痛ましいかな。三周の退大は三千塵点の劫を経、竜女が修行は久已修学の功を積することを。爰に我が弥陀牟尼、法積苾芻たるの古、深く自力自証の行人の空しく聖道難行の辛苦に疲るることを憫れんで、愚童索多の順次往生の大願を発したまうが故に、若不生者の大願業力に執持せられて、我等薩埵必ず捨身他世必生彼国の巨益に誇るものなり。焉ぞ思議すべけんや。抑(そもそも)、小機鈍遅の一類有りて、円道密路に泥滞せば、必ず二死の瞼難に落つべし。若し、二死の厄難に値わば、仮令(たとい)廟堂の上に居り金銀の錺りを得とも、胡(なん)の益か有らんや。然れば則ち我等一切の衆生等、只だ尾を塗中に曳きて宜しく死を多生に免るるべし。

夫れ、六大四曼の観行に暗うして、忝くも遍照の位に登り、破戒無慚の質を錺りて、謹みて持律の職に居る人、定んで二死の大怖に逢う者か。死後の服飾実に之を楽うべけんや。最もこれを厭うべし。有識の道人、意に問いて自ら知れ。抑(そもそも)も小師九拝して恭しく南北諸宗の群英に白して言さく。夫れ当に自力瞼難の蜀道を

出でて、今他力易往の径路に入り、胎胞の樊籠を離れて、安養の太虚に遊ぶべし。夫れ生死栄枯は、是れ風前の軽塵、世間の潤色は亦た水上の浮泡なり。朝には起きて紅顔の漸く衰ることを恨み、夕には寝て少年の已に老いたるを嗟く。

華厳に曰く、(19)

若し、諸の衆生有りて未だ菩提心を発さざれども、一び仏名を聞くことを得れば決定して菩提を成ずと。

南無阿弥陀仏。

広長舌相勝 第十九

夫れ証知証誠は、是れ衆会の疑殆を除き、舒舌遍覆は乃ち凡夫の信心を催す。其の中に小事を証するに、釈尊独り舌相を髪際に至し、大事を説くには牟尼自ら長舌を三千に覆う。然るに逝多林中に説教は、一代の教主長舌を大千界に舒べて、以て凡夫の疑見の執を断除し、給孤独園の大会には恒沙の如来広舌を三千刹に覆いて、以て釈迦の言説の真なることを証明す。此等の奇特は、一

(19)『四十華厳』（正蔵一〇・一二四上）。

代に於て分絶し、諸教に於て明さざる者なり。

智覚禅師の神棲安養の賦に曰く、[20]

詳するに、夫れ広長の舌讃は十刹同じく宣ぶ。

『経』に曰く、[21]

我が今者（いま）、阿弥陀仏の不可思議功徳の利を讃歓するが如くに東方に亦た阿閦仏、是れらの恒河沙数の諸仏有りて、各其の国に於て広長の舌相を出して遍く三千大千世界に覆いて誠実の言を説きたまう。汝等衆生、当に是の称讃不可思議功徳を信ずべしと。此の広長の舌相は祇（まこと）に是れ不妄語を表す。夫れ、世人三生に妄語せざれば、舌、鼻尖を過ぐと。而て聖人の舌は髪際に至る。今、三千に覆いて十方同じく証す。故に当に真実なるべし。請う、信心を堅くせよ已上と。

亦た、『群疑論』に曰く、[22]

問て曰く、如来の説経は、皆な機に逗して物を化さんが為に悉く信向の者の為には説き、疑惑の者の為には宣べたまわず。故に『薬師経』に言く「仏は信者の為に施して、疑者の

(20) 宗暁『楽邦文類』（正蔵四七・二一五上）。

(21) 出典未詳。

(22) 懐感『群疑論』（浄全六・二八下～二九下）。ただし浄全所収の『群疑論』とは文言が異なり、正蔵所収の『群疑論』（正蔵四七・四一中～下）とは文言が合致する。

為には説きたまわず」と。何が故ぞ説経の中に舌相を舒べて物を勧めて信を生ぜしむる有り。舌を舒べずして但だ妙理を宣べること、又甚深の法を説くには、凡夫暁り難くして疑を懐き謗を生ず。『法華経』を説きて二を会して一に帰するが如きは、二乗の人等信心を生ぜざるが故に。多宝世尊は宝塔を涌して与(ために)実を証したまいき。仏、舌相を舒べて不誑を現じて以て真を表し、三たび当信の言を陳べて方に誠諦の語を申さるることを須い、今、『阿弥陀経』に唯だ西方の依正両報の荘厳の浄相を説きて、物の往生を勧めて正信を生ずること易し。何ぞ六方或いは十方の仏、同じく舌相を舒べて物を勧めて信を生ずることを須うるや。

釈して曰く、按ずるに『称讃浄土経』の下文に仏自ら陳説したまわく、十方恒沙の諸仏、釈迦牟尼仏の『称讃浄土経』を説きたまうを見了りて、各々本土に在りて異口同音に倶時に歎じて言く「釈迦牟尼仏、能く娑婆世界五濁悪世に於て阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の為に是の一切世界の極難

信の法を説くこと、釈迦牟尼仏、既に諸仏同声の讃歎を得て舎利弗に告げて、我れ五濁悪世に於て阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の為に是の一切世間難信の法を説く。是れを甚難となす」と。如来、百千等の経を説きたまうと雖も、難説と言たまわず、唯だ『称讃浄土経』のみ九張の紙有るのみ。恒沙の諸仏及び釈迦牟尼世尊、咸く此の『経』は難信難説と説きたまえり。蓋し以れば、仏、十二部経を説きたまうに、一切の外道は皆な誹謗を生ずれども是れ仏弟子は咸く信心を発す。今、『阿弥陀経』を説きて、五逆十悪の罪根の衆生も唯だ能く念仏すれば皆な浄土に生ずと言たまえば、仏弟子の信向の者と雖も亦た疑惑を生じて此の言を信ぜず。現に、今時の四部の衆を見るに咸く正信有る、尚お念仏して即ち生ずることを得ざらんかと疑う。故に知んぬ、此の『経』は甚だ信を生じ難きことを。一切種智をもて預して未来に此の衆生有りて疑を懐く者、衆(おお)からんことを知りたまうが故に、同じく舌相を舒べて法の至真なることを表して、物を勧めて修学

せしめたまう已上。

又た、観師の云く、[23]

問う。如来大人何を以てか信を表する時、乃ち舌を舒ぶるや。答えて大論に曰く、仏、人間の相法に同ずる故なりと。謂く。舌を舒べて鼻に至す者は必ず虚語せずと。況んや大千に覆わんに実無きことを得んや。然るに如来、小事を証せんが為には舌を舒べて面に覆せ、或いは髪際に至す。若し大事を証するには即ち舌を舒べて大千に覆いて証したまう。微因著果人の信ぜざらんことを恐る。苦輪を捨つるの要躅、涅槃を証するの疾逕なり。其の事軽からざれば其の証大を須ゆ。故に三千世界に覆う。「当信是称讃」等とは、称は即ち其の徳を述べ、讃は即ち其の義を覚す。心慮も亦た測らざるを不可思と曰い、言談の及ばざる所を不可議と名づく。諸行積もると雖ども念仏の功に方靡し。諸福多しと雖も此の経の徳に儔うし難し。故に恒沙の諸仏護持して滅せざらしめ。記憶して以て心に在り。故に「称讃不可思議功徳一切諸仏所護念経と

(23) 基『阿弥陀経疏』（浄全五・五六九下）。

言う」と已上。

原ずれば夫れ、教主薄伽梵は靁震の音を出して別意の弘願を直示し、恒沙の天人師は広長の舌を鼓して尊号の霊徳を証明す。実に是れ卓犖衆典の大会、超絶他経の化儀なる者をや。古に曰く、[24]

山に登りて呼ぶ音五十里に達することは、高きに因りて響けばなり。造父御を執りて千里に疲れざることは馬に因りての勢なり已上と。

夫れ、一心摂取の佳名遥かに万年百歳の遐代に聞こゆることは、是れ則ち、釈迦氏氏闡揚の梵音、高く六合の表に響き、「恒沙牟尼証明」の真言は遠く三千の外に動する所以か。又た、三学分外の一切衆生等、皆な悉く二死の瞼隘を超え、弥陀覚王の大願業力に乗ずるの故なり。嗚呼、日月旋歴すれば冬雪頭に積み、星霜転配すれば秋浪面に湛う。夫れ、三業の罪垢を六字尊号の泉に浣ぎ、六根の業塵を八功徳池の浪に洗え。

南無阿弥陀仏。

(24) 出典未詳。

証誠奇恃勝第二十

夫れ、鷲嶺開顕の砌には多宝一仏涌現し、王宮説法の場には四方四仏倶に来たる。然るに今、逝多林の妙典には界内界外の諸仏悉く影響して七朝の称仏を証明し、孤独園の設化には浄土穢土の教主皆な来臨して凡夫の往生を証誠す。此れ等の勝相を詳するに一乗法華にも超過し、十番の神咒にも卓犖せるものか。観師の云く、(25)

十方恒沙の諸仏は広長の舌を出して各々勧進を垂れたまう。是れ。実語を表するなり。仰信を取るべし。彼の鷲峯の妙法は多宝一仏証明し、又た、王城の金典は四方四仏倶に説く。凡そ厥の処処の集会の道場も、今説の舌相証誠の盛なるには如かず。設い、彼の伏怨世界の疑惑の者なりと雖も豈に信受せざらんや。是の故に双林決断の筵には浄土の一門に於て更に疑決無し已上と。

夫れ『法華』の証明には多宝、広長の舌を舒べず。金経の同説には、四仏、長舌の相を現ぜず。是れ則ち、三学式内の通談にして

(25) 永観『往生拾因』（浄全一五・三七三上）。

六八格外の別教に非ざる故か。爰に吾が弥陀婆伽婆帝の本誓は恢恢焉として大虚に過ぎ、晃晃焉として思議を出でたり。十方の調御、善能く之れを知りて、物のこれに迷うを愍みて大光を八方上下に耀(かがや)かし、広舌を三千大千に覆い、釈迦如来の誠諦の真言を証明したまうものなり。是れ専ら格外玄旨の別願なる故か。縦令い婆藪の徒と雖も、焉ぞ堅執を蕩除せざるべけんや。学者等自ら商量して、式内と格外との証誠の優劣を知るべし。

問うて曰く、『大般若経』の四百一に曰く、

爾時世尊、師子座上に於て、自ら尼師壇を敷いて結跏趺座し瑞身正願して対面念に住し、等持王妙三摩地に入りたまう。諸々の三摩地は、皆な此の三摩地の中に摂入す。是れ、所流なるが故に。爾の時に世尊、(乃至)一一の身分より各々六十百千俱胝那庾多(なゆた)の光を放ちたまう。此の一一の光、各々三千大千世界を照らす。此れより展転して遍く十方殑伽沙(ごうがしゃ)等の諸仏世界を照らす。其の中の有情、斯の光に遇う者は必ず無上正等菩提を得。(乃至)爾の時世尊、身の常光を演べて此の三千大千世

界を照らしたまう。此れより展転して遍く十方殑伽沙等の諸仏世界を照らしたまう。其の中の有情、斯の光に遇う者は必ず無上正等菩提を得。爾の時世尊、其の面門より広長の舌相を出だして遍く三千大千世界に覆いて熙怡微笑して復た舌相より無量百千倶胝那庾多の光を流出す。其の光、雑色なり。此の雑色の一一の光中より宝蓮華を現す。其の華千葉なり。皆な真金色にして衆宝荘厳せり。是の如きの光華、二千界に遍す。此れより展転して十方殑伽沙等の諸仏世界に周流す。諸々の華台の中に皆な化仏有して結跏趺坐して妙法音を演ぶ。一一の法音、皆な六種波羅蜜多相応の法を説く。有情聞く者必ず無上正等菩提を得。爾の時世尊、座を起たずして復た師子遊戯等持に入りて神通力を現して此の三千大千世界をして六種に変動せしむ。謂く、動、極動、等極動、踊、極踊、等極踊、震、極震、等極震、撃、極撃、等極撃、吼、極吼、等極吼、爆、極爆、等極爆、又た此の界をして東踊西没、西踊東没、南踊北没、北踊南没、中踊辺没、辺踊中没、ならし

む。其の地清浄光沢細輭にして諸々の有情利益安楽を生ず。時に此の三千大千世界の所有の地獄傍生鬼界及び余の無暇険悪趣玩の一切の有情、皆な苦難を離る。此れより命を捨て、人中及び六欲天に生ずることを得て皆な宿住を憶えて歓喜踊躍して同じく仏所に詣でて慇浄の心を以て仏足を頂礼す。此れより展転して十方殑伽沙等の諸仏の世界に周遍す。仏の神力を以て六種に変動す。時に彼の世界の諸々の悪趣等の一切の有情、皆な苦難を離る。此れより命を捨て人中及び六欲天に生ずることを得て皆な宿住を憶えて歓喜踊躍して各々本界に於て同じく仏所に詣でて仏足を頂礼す。至乃爾の時世尊、座を起たず熙怡微笑して其の面門より大光明を放ちて遍く三千大千の仏土并びに余の十方殑伽沙等の諸仏世界を照らしたまう。時に此の三千大千の仏土の一切の有情、仏の光明を尋ねて普く十方殑伽沙等の諸仏世界の一切の如来、応正等覚の声聞、菩薩、衆会に囲繞せられたまえると及び余の一切の有情無情の品類の差別を見る。時に彼の十方殑伽沙等の諸仏世界

の一切の有情、仏の光明を尋ねて亦た此土の釈迦牟尼如来、応正等覚、声聞、菩薩、衆会に囲繞せられたまえると及び余の一切の有情無情の品類の差別とを見る。爾の時に東方に殑伽沙等の世界を尽くして最後の世界を名づけて多宝と曰う。仏を宝性と号す。現に菩薩の為に大般若波羅密多を説きたまう。彼に菩薩有り、名づけて普光と曰う。此の大光大地変動及び仏の身相を見て心に猶予を懐きて前(すす)んで仏所に詣でて白して言く、世尊、何の因、何の縁ありてか、而も此の瑞あるやと。時に宝性仏、普光に告げて言わく、此こより西方に殑伽沙等の世界を尽くして最後の世界を名づけて堪忍と曰う。仏を釈迦牟尼と号す。将に菩薩の為に大般若波羅密多を説きたまう。彼の仏の神力をもっての故に斯の瑞を現ずと。普光聞き已りて歓喜踊躍して白して言さく。世尊、我れ今請う。堪忍世界に往きて釈迦牟尼仏及び菩薩衆を観礼し供養したてまつらん。唯だ願くは聴許したまえと。時に宝性仏、普光に告げて言わく、善哉善哉、汝が意に随いて往けと。即ち、千

茎の金色の蓮華を以て其の華千葉にして衆宝荘厳せり。普光に授与して之れに誨(おし)えて曰く、汝、此の華を持ちて釈迦牟尼仏の所に至りて我が詞の如くに曰え。宝性如来問を致すこと無量なり。少病少悩に起居軽利に気力調和にして安楽に住したまうや不や。世事忍ぶべしや不や。衆生度し易しや不や。此の蓮華を持ちて以て世尊に寄りて仏事を為すと。至乃普光菩薩華を受け勅を奉じて無量百千倶胝那庾多の菩薩と及び無数百千の童男童女と与(とも)に仏足を頂礼して右に繞りて奉辞して各々無量の上妙の供具を持して発引して来たる。所経の東方の諸仏の世界、一一の仏所にして供養恭敬、尊重讃歎して、空しく過ぐる者無し。此の仏所に到りて双足を頂礼して繞ること百千帀して却て一面に住し普光菩薩前んで仏に白して言さく、世尊此れより東方に殑伽沙等の世界を尽くして最後の世界を名づけて多宝と曰う。仏を宝性と号す。問を世尊に致すこと無量なり。少病少悩に、起居軽利に、気力調和にして、安楽に住したまうや不や、世事忍ぶべしや不や、衆生度し易

しや不や。此の千茎の金色の蓮華を持ちて以て世尊に寄りて仏事をなすと。時に釈迦牟尼仏、此の蓮華を受けて還りて東方の諸仏の世界に散ず。仏の神力をもっての故に、此の蓮華をして諸仏の土に遍せしむ。諸の華台の中に各々化仏有して結跏趺坐して諸の菩薩の為に大般若波羅密多を説きたまう。有情聞く者必ず無上正等菩提を得。是の時に普光及び諸の眷属此の事を見已りて歓喜踊躍し、未曽有なりと歎じて各々善根に随いて供具に多少あり、佛菩薩を供養し恭敬し尊重し讃歎し已りて、退きて一面に坐す。東方界も皆な亦た是の如し。南方、西方、北方、東北方、東南方、西北方、下方、上方、亦た復た是の如し。繁を恐れて略去す。爾の時に、此の三千大千堪忍世界に於て衆宝充満し諸の妙香華其の地に遍布し宝憧幡、蓋処処に行列す。華樹、菓樹、香樹、鬘樹、衣樹、宝樹、諸雑飾樹、周遍荘厳して甚だ愛楽しつべし。衆蓮華世界普華如来の浄土、曼殊室利童子、善住恵菩薩、及び余の無量の大威徳の菩薩摩訶薩の本所居の土の如し已上と。

又た、『大日経』第二に曰く、(26)

(26) 善無畏・一行訳『大日経』（正蔵一八・一二下）。

爾の時毘盧遮那世尊、一切の願を満たせんとして広長の舌相を出だして、遍く一切の仏刹に覆いて清浄法幢高峯観三昧に住したまう。時に仏、定より起ちて、爾の時に一切如来法界に遍じて、無余の衆生界を哀愍して、声を発して、此の大力大護明妃を説きて曰く、南麼薩婆怛他。

『同疏』第九に曰く、[27]

爾の時に世尊、既に請を受け已りて、将に大力大護の明妃を説きたまわんとするが故に、一切の願を満たさんとして広長の舌相を出だして遍く一切の仏刹に覆うて、清浄法幢高峯観三昧に住したまう。此の中に出と言わば、梵本を正しく翻せば当に発生と言うべし。旧訳には、或いは奮迅と云う。此の広長の舌相を出だすことは、即ち是れ如来奮迅して、大神通力を示現したまうが故に、会意して之れ言うなり。此の三昧は、如来の広長舌相に於て、遍く一切仏刹に満ず、と。

又た曰く、[28]

生身の仏の如きは、将に誠実の言を発さんとする時、或いは

(27) 一行『大日経疏』（正蔵三九・六七三上）。
(28) 一行『大日経疏』（正蔵三九・六七二下）。

広長の舌相を示して遍く其の面を覆いて、而して応度の者に告げて言く、汝が経書の中に頗る是の如き相有る人の、而も虚妄の語を出だすを見るやいなやと。若し摩訶衍の中に、或は舌相を示して遍く三千大千世界を覆う。今は世尊、将に如来平等の語を説かんとするが故に、此の語輪横竪に皆な一切法界に遍ずることを明かす。故に広長語輪相と曰う已上と。

夫れ畢竟空寂の梵筵に於ては、現在十方の諸の仏、般若を同時同会に説き、各説三蜜の大会に在りては、毘盧遮那如来舌相を一切仏刹に覆う。若し爾らば、浄教の証誠の余典に卓犖（たくらく）するの義、更に成立せず。之の如きいかん。

答えて曰く、同説般若の諸仏は、未だ長舌を舒べず、遍覆諸刹の舌相は唯だ是れ毘盧の一仏なり。然るに今の祇陀林会の説教に至りては、十方恒沙の諸仏、各々広長の舌相を鼓して懃に七朝の持名を証するの優劣、智人自ら商量せよ。矧や又た、般若毘盧の両典は只だ是れ自説の長舌にして未だ必ずしも証明の広舌にはあらず。今は、証誠の奇舌に就いて以て語を為す。学者知んぬべし。

又た解すらく、三蔵詳勘の意は、加持塵道世界の教主悉達所成の生身の釈尊と、広大金剛法界宮の能化自性法身の毘盧遮那如来とを比対して、以て其の舌相の寛狭を論じて、未だ必ずしも逝多証誠の諸仏の長舌を指すにはあらず。然るが知る所以は、今此の大会の恒沙の諸仏は、是れ則ち厳浄仏土の教主として『称讃浄土経』の説無量の三千界を以て一仏所主の国土と為するを以ての故なり。『法華』の第四に富楼耶尊者の未来成道の国土の相を説きて曰く、(29)

当に此の土に於て阿耨菩提を得て、号して法明如来と曰うべし。其の仏は恒河沙等の三千大千世界を以て、一仏土に為して七宝を地と為す。地の平らなること掌の如くならん已上と。

又た『大論』の九十二に曰く、(30)

問うて曰く、何等か是れ浄仏土なりや。答えて曰く、仏土とは、百億の日月、百億の須弥山、百億の四天王等の諸天、是れを三千大千世界と名づく。是の如き等の無量無辺の三千大千世界を名づけて一仏土と為す。仏、此の中に於て仏事を施作したまう。仏、常に昼三時、夜三時に仏眼を以て遍く衆生

(29) 鳩摩羅什訳『法華経』（正蔵九・二七下）。
(30) 『大智度論』（正蔵二五・七〇八中）。

を観じたまう。誰れか善根を種うべき、誰れが善根成熟し増長し、誰れが善根成就して度することを得べきと。是を見已りて、神通力を以て、所見に随いて、衆生を教化す已上と。

夫れ、『称讃』の明文を以て『法華』『智論』に挍合して之を推すに、十方証明の如来等、全く単の三千界を居すべからざること明らけし。若し所居の器界、無量の三千ならば、能覆の舌相、豈に唯だ一箇の三千界のみに局らんや。若し之に依りて之れを言わば、『毘盧』と今典とに孰れぞ。設し直ちに多少門に約して以て其の高卑優劣を論ぜば、是れ乾坤か、王庶か。智者商量せよ。智者商量せよ。又た設い証明の諸仏等、穢土摂化の教主と雖も、穢方亦た無数の三千を以て一化の世界と為すの土有り。

且く『大方等大集経』第十四に曰く、(31)

爾時に仏有す。号して浄一切願威徳勝王如来と曰う。至乃彼仏の世界を名づけて現無量諸仏刹土と曰う。至乃彼仏の世界を何が故ぞ名づけて現無量諸仏刹土と曰うや。至乃彼の世界は、百億の三千大千世界と等し。至乃爾時に現無量諸仏刹土の中に

(31)『大方等大集経』（正蔵一三・一一一上～一一二中）。

一の転輪聖王あり。名づけて衆天灌頂と曰う。三千大千世界を典領せり。諸仏の所に於て久しく徳本を植えて、利根智慧威徳成就す。灌頂聖王に三万六千の子あり。至乃爾時に浄一切願威徳勝王如来、諸天世人大衆の与(ため)に恭敬囲遶せられて衆天灌頂聖王の住処に遊び。至乃爾時に衆天灌頂聖王、仏を供養せんが為の故に一小千世界を荘厳して以て妙堂と為す。至乃復た荘厳一堂あり。一四天下と等し。至乃爾時の衆天灌頂転輪聖王とは、豈に異人ならんや。至乃即ち今の虚空蔵菩薩是れなり已上。

是れ即ち穢方出世の如来の無数の三千を以て、一仏土と為るの誠証なり。

請い問う。曰く、輪王有りて以て治化し、四州有りて以て分地す。故に知んぬ、是れ穢土の外器内身ということを。但し、無有諸女人純一変化生宝華開合知有時節等の妙華有ることは、同居の穢土の好世の浄土なる故か。智人知んぬべし。又た『大論』九に云く、(32)

一世界に二仏出ること有らず。百億の須弥山百億の日月を名

(32)『大智度論』（正蔵二五・一二五中）。

づけて三千大千世界と為す。是の如くの十方恒河沙等の三千大千世界、是れを名づけて一仏世界と為す。是の中に更に余仏無し。実には一人の釈迦牟尼仏なり。是の一仏世界の中にして常に諸仏の種種の法門、種種の信、種種の因縁、種種の方便を化作して以て衆生を度す。是を以ての故に、『多持経』の中に一時一世界に二仏無し。十方仏無しと言うにはあらず[上已]。

此の論文、正しく十方恒河沙等の三千大千の国土を以て一仏所主の国土と為すと見たり。又た、『大智度論』の説に依りて之を観れば、単に三千大千世界を以て仏世界とは名づけず。梵王亦た主たるが故に仏世界に四種有り。三千世界を以て一数と為して、十方如恒河沙等是れ一仏世界なり。此の一仏世界の数、恒沙等の如くなる。是れ一仏世界なり。此の世界の海数、十方如恒河沙なる、是れ一仏世界なり。此の世界数十方無量なる、是れを一仏世界と名づく。[云云]『論註』に曰く、「若し、一仏三千大千世界を主領すと言わば、是れ声聞論の中の説なり。若し諸仏遍く十方無量無辺世

界を領すと言わば、是れ大乗論の中の説なり」[33]と。此れは『大論』所説の四種仏土の中、第四の十方無量一仏世界の国土を指す。若し爾らば、敵者の疑闕、叩かざるに自ずから開けん。又た、義寂の『大経の疏』中に曰く、[34]

『智度論』に曰く、三千大千の国土を一世界と名づけ、一時に起りて一時に滅す。是の如き世界、十方如恒河沙等、是れ一仏世界なり。是の如き一仏世界海数、如恒河沙等、是れ一仏世界海なり。是の如き仏世界海数如十方恒河沙、是れ仏世界種なり。是の如き世界種十方無量なる、是れを一仏世界と名づくと。第二と第五とを同じく仏世界と名づくとは、変化と受用との二仏異なるが故なり。第三と第四とは化仏世界なり。積数に成るが故に海種の名を立つ。第一を仏世界と名づけざることは、梵王も亦た王摂と為ることを得るが故に、受用土の中に海とも種とも説かざることは積種前に同じ。例して知るべきが故に已上。

請い問う。曰く、夫れ初祖の註論によりて次上に之を引くが如し之れを詳ら

(33) 曇鸞『往生論註』（浄全一・二二一上）。
(34) 義寂『大経疏』※散佚か。

かにすれば、『大論』に挙げる所の五種の仏土は、皆な是れ穢土出世の諸仏国土の種種の異なるのみ。鼻祖、何故ぞ此の如き解を作すや。本論の前後の文を勘弁するに、正しく是れ穢方摂化の相貌なり。故に判ずるならん。寂公に『大論』の現文報化二仏の一判有りと雖も、只だ是れ一途のみ。又た設い、第二と第五とは変化受用、第三と第四とは化仏世界の義を存すと雖も、河沙証印の諸婆伽婆等、若し報応二仏に亙らば明らけし。証誠の諸仏は無量の世界を以て、以て一仏所主の国土と為したまうことを。若し爾らば、学者等謂うこと莫れ。証明念仏の恒沙の諸仏は単の三千世界を以て、以て一仏所主の国土と為すとは。抑々、又た或いは、一大三千一仏国土と言い、又た、輪王極多不過四洲と云うと雖も、亦た、三千界を統領するの大転輪王無きに非ず。若し爾らば、設い穢土の教主と雖も恒沙の大千土を以て、以て一仏の所化の国と為んに何の不可か有らん。

曰く敢て問う。曰く、夫れ証明念仏の恒沙如来の所居の国土は、広く浄邦穢土、単重三千等の国土に通亙す。学者、局分すること

莫れ。

問て曰く、経に「各於本国、出広長舌相」[35]と説けり。何ぞ今、証明諸仏逝多会に来現すと言うや。

答えて曰く、蓮経金典の二会に已に往きて証明を致す。弥陀弘願の一教、盍んぞ来りて証誠を加えざらんや。但し、経文に至りては、「各於本国」とは、舌相を出だす処を指し、「説誠実言」とは、独園に来るの相を顕す。文言委悉ならざることは、是れ什公の存略のみ。高祖大師、経文を詳勘して云く、[36]

『弥陀経』に説くが如き、若し男子女人ありて七日七夜及び一生を尽くるまで、一心に専ら阿弥陀仏を念じて往生を願ずれば、此の人は常に六方恒河沙等の仏、共に来りて護念することを得。故に護念経と名づく[已上]と。

請い問う。曰く、迷盧を芥子に納め、巨海を毛孔に湛うることは是れ仏境界の不思議なり。若し爾らば、設い恒沙諸仏、逝多の一会に来集すると雖も豈に容受せざるべけんや。此の義、沖邈なり。知らんと欲せば来学せよ。

(35) 鳩摩羅什訳『阿弥陀経』（浄全一・五四～五五）。

(36) 善導『観念法門』（浄全四・二二九上）。

問うて曰く、上の敵者は、「各於本国出広長舌相」の文を引きて、以て誠証と為して諸仏共来証明念仏の旨を沮(はば)む。立者之を答えとして、梵本に定んで諸仏来証の文有るべし、漢本に無きは是れ什公の存略なりと曰えり。若し爾らば、其の証誠、出でて何れの処に在りや。

答て曰く、此れに総別の二例有り。総は謂く、天台大師のいわゆる但論本文千巻、什師作九倍略之、何必無此解の定判是れなり。別は謂く、大智律徳のいわゆる若依唐訳、則列十方、今謂但挙、六方四維自摂、但言略耳の解釈是れなり。啻だ什公独り略訳を好くするのみにあらず。耶舎も亦た然なり。『観経』に云く、「仏告韋提希、欲観彼仏者」[37]已上。

本疏に之を受けて曰く、[38]

問て曰く、夫人の置請は已に通じて生の為にす。如来の酬答に至るに及びて、但だ韋提のみを指して生に通ぜざるや。答えて曰く、仏身は化に臨んで法を説きて以て機に逗す。請せざるすら尚お自ら普く弘む。何ぞ別ち指して等しく備えざる

(37)『観経』(浄全一・四二)。
(38)善導『観経疏』(浄全二・四五上)

ことを論ぜん。但し、文略なるをもっての故に無し。兼為の心は必ず有り[已上]と。

此れ等の例に準拠して之れを語[い]えば、必ず「各於本国、出広長舌相、遍覆三千大千世界」と「説誠実言、汝等衆生、当信是称讃、不可思議所徳、一切諸仏所護念経」との二文の中間に於て、還摂舌相、降臨逝多の語有るべし。

難じて曰く、「了義大乗依文判義」とは世親菩薩詳経の定規なり。経に既に諸仏の来相を挙げず。若し、文の如くに義を取らば定めて四依の定判に合わんか[是一]。抑々又た、公は十号の世尊に非ず。何ぞ恣に経を説くや[是二]。若し爾らば、所立不明なり。如何。答えて曰く、夫れ今の勘判は、是れ無文有義智者用の意にして、有文有義常人用の旨には非ざるのみ。次に摂大乗の文に至りては、此れは是れ、一部の大旨に約して以て了不了の二途を定むるの意なり。未だ必ずしも一文一句に約して、以て其の旨を語るには非ず。次に「小子非仏何恣説経乎」というは、先ず智者大師光明尊者等の如来の専使を沮んで、然して後に来りて我を責めよ。

先聖既に容有に従えて増句釈義す。小子能く上古の蹤跡に任せて、之れを守文す。誰か之れを非拠と曰わんや。

請い問う。曰く、夫れ諸仏、若し来証せずんば、是れ一会冷然として亦た聊爾なり。衆聖若し故さらに来印せば、乃ち梵場厳重として亦た群会なり。故に曰うなり。法華の一仏、金典の四仏、皆な来りて仏事を施作す。証明念仏の諸仏のみ、何ぞ各々自土に居り証印を致さんや。智人省察せよ。智人省察せよ。

問うて曰く、六方如来証明念仏の霊相は唯だ逝多一会の説教に局るとやせん。将た又た、『大経』『観経』の説時に於いても、証誠尊号の義有りや。

答えて曰く、此の旨、本朝の先達、以て測り叵しと為て両解を為す。今謂く、此の綜未だ必ずしも刋定し難きの事にあらず。如何んが断わり易きや。夫れ祇林の証明は是れ、偏えに見末代に被れり。王鷲の二会は乃ち仏世の機を摂す。

請い問う。曰く、親り聖化を蒙りて八十、四八の金容を拝し、見に仏会に陪りて、六十四種の梵音を聞くの四衆八部等、皆な仏

説を聴受して悉く深信を生ず。然れば則ち、順次即往の人、鷲頭山頂に於いて至心持念決定即往の誠言を聞くときは、則ち信受奉行して慮らず。王舎城宮に在りて具足十念必生浄土の教示を奉るときは、則ち歓喜信楽して疑わず。二会の当機純信にして断疑生信す。故に証明念仏の相無し。月重山に隠れ、風大虚に息ての後、一万二三千年の間は五濁極増の上の猶お極増なり。此の悪時悪世の衆生等、三学分外称名往生の誠説を見聞すと雖も、疑謗多くして信敬すること有らず。教主能仁氏、氏七朝持名九品即往の直示に於いて八方上下一切衆聖の証印を請す。能仁の意請に由りて、諸仏の証誠有り。此の如き摂化は只だ是れ滅後の凡夫の為にするのみ。

問て曰く、宗師は、諸仏証明の義を詳簡すとして、「為断凡夫疑見執、皆舒舌相覆三千」と曰えり。若し爾らば、鷲峯王宮二会の凡夫の中に豈に疑見執心の輩無からんや。給孤独園群来の異生の内に、何ぞ証明生信の彙い無からんや。之に依りて之を語らば、従上の所立、更に成立せず。如何。

答て曰く、今は如来設化の元旨に約して、以て判を為す。君、偏難を致すこと莫れ。且く大底を按ずるに、寿観両経の先後は学者論ずと雖も、逝多の一会第三に在りて之を説くという。衆車一轍にして異途無し。然るに化主諸余の万行を廃捨して称名の一善を直説したまうの時、六合諸仏の証明有り。大会之を聞て皆な念言すらく、既に此の一会の念仏に於て諸仏の証印有り。故に深信して疑わず。彼の両会の中に、亦た、称名の妙行有り。彼此の正行、全く同じにして異無し。若し爾らば、彼の二会所説の尊号正定業に於て、弥々信心を増長し、倍々持念を激励すべし云云。此れは是れ、後を以て前を顕すの意なり。此の如く三部合論して之を語らば、耆山上茅、逝多林会の在座聞経の異生凡輩等、純一に信奉して、更に疑惑無からんものか。

問て曰く、若し爾らば、何ぞ祇林証印偏被末代と曰うや。

答て曰く、豈に先に曰わずや。設化の元意に約して、以て断ずることを為すとは。彼の一乗円宗に涅槃四教偏被末代と云うと。沙羅林中蘇息小果の一類無きに非ず。瓔珞偏存別門と判ずと雖

も、亦た、『瓔珞経』中、四教並説の解釈有り。彼に準説して此れを知れ。又た、「亦令未来世、一切凡夫、欲生彼国者、当修三福」[39]と説き、「如来今者、為未来世、一切衆生、為煩悩賊、之所害者、説清浄業」[40]と宜ぶと雖も、七万の釈種及び自余の如来在世の時の即往安楽の凡夫衆生等、豈に一向に定機ならんや。亦た、何ぞ偏に散根ならんや。智人省察せよ。

問て曰く、上に逝多の証明を以て鷲王の称名を信ずと言わば、此の義、明ならず。夫れ人命停らざること山水よりも過たり。今日は存すと雖も、明けなんまに保ち難し。若し爾らば、只だ二会の正説を聴きて逝多会に至らずして、滅度を取らんの人は称名往生の信心、薄少ならんや。如何。

答て曰く、此の難、非なり。若し君の言う所の如きんば、応に三周の声聞等の中に、宝塔涌現、多宝証明の爾前に便て入滅するの一類有らば、信楽一乗の心浅短なりと言うべきか。彼れ若し存して、宝塔品に至りて、「如所説者、皆是真実」の証明を聴きて、弥々信心を増すること有らば、此れ亦た存して、祇陀会に臨んで、「説

(39)『観経』(浄全一・三九)。
(40)『観経』(浄全一・三九)。

誠実言、当信念仏」の金言を聞きて倍々寿観を信ずべし。設い宝塔に至らずして滅を取り、祇林に臨まずして寂に帰するの人と雖も、信楽得益、薄浅なるべからず。君、謂うこと莫れ。大中二会の凡夫、逝多の梵場に至らずして滅を取らば、即往の信心薄少浅短なるべしと。

問て曰く、孰れか知る、耆山上茅両会の説教に亦た諸仏の舒舌証明の相有らんとは。但し文に無きは略ならん。如何。

答て曰く、夫れ証印証誠とは、総じて説教厳重の儀式。別して安養教法の秀句なり。若し爾前両会の梵席に証明念仏の相有らば、集経の聖人、応に専ら之を挙出して以て三時行者の信心を激勧すべし。然るに大本中本の両文を詳するに、曽て舒舌証印の相なし。設い大本の請仏讃歎の語に依りて以て証明の義を成すと雖も、『観経』の中に全く其の相無し。矧や又た、讃歎と証誠と同有り、異有り。所謂る讃歎は是れ広、証誠は是れ狭なり。若し爾らば、讃歎の文を引きて以て証誠の拠には備え難きものなり。

敢て問う。曰く、此の難、然るべからず。夫れ諸仏の証明は是

れ浄教の肝心、一経の骨目なり。数箇の訳人、之を略去して何の詮か有りや。若し存略すと言わば譬えば八陳に列して大軍を忘れ、瘵家に入るに霊薬を忘れしが如し。之を以て思えば、貝牒に無きが故に三蔵之を訳せざるのみ。什公の略翻を好むや。只だ繁文を除きて要義を去(さ)けず。此れ等の意を以て之を謂わば、逝多爾前の両経には証明無きこと必せり。是れ即ち刋定し易きの意のみ。智人省察せよ、智人省察せよ。

古に云く。日、中すれば則ち昃(かた)ぶく、月、盈つれば則ち食す。天地盈虚、時と消息す。況んや人に於ておや。況や鬼神に於きておやと。夫れ名号の網罔を生死の巨海に張りて六趣の魚黿を泥洹の彼岸に済う。南無阿弥陀仏。

不誨現行勝 第二十一

夫れ黄面の老氏、自れ説きて言く。雪山の中には薬毒倶に生じ、楞伽の峯には唯だ栴檀のみを生ずと。二道の典籍其れ然らざらんや。静かに以れば、人間の栄耀は是れ夢中の快楽。有為の寿福は

乃ち幻間の歎娯なり。爰に遮那勤修の期心を温(たず)ぬれば、頓超十地頓入仏地の高果なりと雖も、尚お増息敬調の悉地の為に兼て択地造壇の秘法を教う。蓮経修習の彙いの所望を聞くは、妙法経力即身成仏の極位なりと雖も、亦た三毒七難の対治の為に仮に観音称念の妙行を示す。此の義、諸経一轍にして更に異途無し。嗚呼。観行を小水の魚に教えて何の詮ぞや。妄報を日中の華に示して何(なに)にかせん。設い愚迷の薩埵有りて現悉の方軌を問うと雖も、大いに呵して之を説くべからず。所以は何ん。妄楽は行道を障え、愛著は修法を妨ぐるが故なり。抑々吾が浄土教に於ては、正依経論の説にまれ、若しくは因明諸文の中にまれ、未だ曽て現悉の方軌を教示せず。斯の事、衆典靄同にして更に異なること無し。学者知りぬべし。但し、経に不遇諸禍浄除業障と説くが如くに至りては、只々是れ修観の人の大士を観るに自ら滅罪生善の功力を得ることを挙げて、全く如来故(ことさら)に消除殃禍の方軌を示したまうにはあらず。又た、行者も強に攘灰招福の願望有るにあらず。文意の云く。不遇諸禍とは、是れ滅罪なり。浄除業障とは乃ち生善なり。

文言の相連、学者見つべし。夫れ行者も強いて有為現修の方軌を望まず。教主も遮して夢幻妄染の行儀を教えたまわず。若し爾らば、孰れの人か諸経の法王と歎ぜんや。何れの輩か衆典の最頂と称せざるべき。凡そ所詮法門の浅深に依りて能詮経典の権実を判ずることは、是れ論主通同の定規、諸師一轍の教相なり。抑々円密の衆経と浄土の三部と之を対判して其の優劣を論ずるの時、厥の高卑、如何。専に卓識智人の商量に任すのみ。

請い問う。曰く、或いは「無横病死亡灾障」[41]とも判じ、或いは「延年転寿長命安楽」[42]とも釈することは、是れ高祖全く浄土の行人に対して此れ等の現益を望みて以て弥陀仏の名を執持せよと教ゆるにもあらず。又た、行者の本期として現生の護持を求めて以て慈尊の霊号を唱念するにもあらず。只だ安心決定の行人のうえには、任運に此の如きの勝益有るなり。此の義、大いに他経に異なり。学者文に臨みて自ら知れ。夫れ聖道諸教の中に現当の二利を示誨することは、譬えば両女倶に居するが如く、浄土三経の文に唯だ即詣の一悉を説くことは、猶お獅子の独り遊ぶに似たり。

(41) 善導『観念法門』（浄全四・二二九下）。
(42) 善導『観念法門』（浄全四・二三三上）。

学者等、急に二女同じく斲せて唯だ獅子の大教を賞翫すべし。夫れ鴛鴦の　蘭菊の萃の変らざるの間、魵　の帳も桃李の色の鮮なるの　なり。南無阿弥陀仏。

法滅利物勝 第二十二

夫れ霜雪は能く青葉を黷(けが)す時にあらずんば、松栢争(いかで)か貞木の名を彰(あらわ)さんや。濁風卒(にわか)に法水を竭すの節無くんば願海独り不滅の徳を施さん。静かに意みれば、六十四種の梵風、鶴林の梢に息み、三十二相の金容、栴檀の煙と登りし自り以往(このかた)、其の遺法に於て三時の不同有り。謂く。正像末是れなり。其の三時とは、仏法の代謝衰減する次第の相を語(い)うのみ。今、其の三時の年暦を案ずるに、諸経の説相一準ならず。且く『悲華経』の中に、仏自ら説きて三百五十五の願に云く、「我れ未来世に正覚を成し已りて涅槃に入りて後、所有の正法世に住ること千年ならん」[43]と。同三百五十六の願に曰く、「像法世に住すること満五百歳ならん」[44]已上と。

(43) 曇無讖訳『非華経』（正蔵三・二一一中）。
(44) 曇無讖訳『非華経』（正蔵三・二一一中）。

又た『摩耶経』に云く、「正法五百年なり」[45]と。「月蔵分」の第十に云く、「我が正法住すること五百年、像法住すること千年ならん」[46]。『賢劫経』に曰く、「正法五百年、像法一千年なり」[47]と。『涅槃経』『正法念処経』之に同じ。『大乗三聚懺悔経』に曰く、「正法像法各々五百歳」[48]と。『大悲経』に云く、「正像各々千年、末法万年なり」[49]已上と。

又た『善見毘婆沙』に曰く、[50]

仏法世に住すること一万年。初の五千年には出家修道して三達の霊智を得、後の五千年には出家修道すれども三霊智を得ず。諸々の比丘等、俗流に同うじて唯だ剃髪袈裟有るのみ已上と。

此等の諸説を案ずるに、如来入涅槃の以後一万年の内に遺法皆な滅尽すということ在文炳然たり。誰か爾らずと云わんや。諸の嫫母（ぼも）、倭傀（いき）善く誉る者も其の醜きことを掩うこと能わざるとは此れは是れ聖道諸教の三時、代謝すること顕然なるを謂うか。爰に吾が弥陀浄土の教行は然らず。遠く末法万年の後の三宝滅尽の時をも利す。是れ即ち浄教は大徳婆伽の大悲出世の本懐なる所以な

(45) 道宣『釈迦方志』（正蔵五一・九七三下）に同文あり。
(46) 出典未詳。
(47) 伝最澄『末法灯明記』（『伝教大師全集』三・四八三）に同文あり。
(48) 闍那崛多訳『大乗三聚懺悔経』（正蔵二四・一〇九四上）。
(49) 出典未詳。
(50) 道宣『釈迦方志』（正蔵五一・九七三下）に同文あり。

り。

『双巻』に云く、[51]

我が滅度の後を以て復た疑惑を生ずること得ること無かれ。当来の世に経道滅尽せんに、我れ慈悲哀愍を以て特り此の経を留めて止住すること百歳ならん。其れ衆生有りて斯の経に値(あわ)ん者は意の所願に随いて皆な得度すべし已上と。

高祖大師之を受けて云く、[52]

万年に三宝滅すとも此の経住すること百年ならん。爾の時に聞きて一念せば皆な当に彼に生ずることを得べし已上と。

慈恩大師の曰く、「末法万年に余経悉く滅すとも、弥陀の一教は物を利すること偏増ならん」已上[53]と。

憬興師の述讃に曰く、[54]

『大涅槃経』には広く仏性を顕す。聖教中の深なり。聖人を逐いて先ず没す。此の経は唯だ浄土を開きて、人をして生を求めしむるは済凡中の要なるが故に。独り留ること百歳なり。機宜、既に異なり。没滅の前後、怪みを致すべからず

(51)『無量寿経』(浄全一・三六)。
(52)善導『往生礼讃』(浄全四・三六二下)。
(53)基『西方要決』(正蔵四七・一〇九中)。
(54)憬興『無量寿経連義述文賛』(正蔵三七・一七〇下)。

上已。

本朝の祖師の云く、[55]

問うて曰く、百歳の間念仏を留むべきこと其の理然るべし。此の念仏の行は唯だ彼の時機に被るとやせん。将た正像末法の機に通ずとやせん。答えて曰く、広く正像末法に通ずべし。後を挙げて今を勧む。其の義、知るべし上已と。

予、此れ等に経文解釈を鈔するに、紫毫と紅涙と前後を争いて俱に降る。於戯毛嬙西施は善く毀れる者も其の好を蔽うこと能わずというは、此れは是れ浄教の末代悪世を益することを謂うか。

問うて曰く、古に云く、[56]

巴歌は和するもの衆し。似量、猿心を騰ぐ、雪曲は応ずるもの稀れなり。了義竜宮に匿る上已と。

彼に準じて之を思うに、聖道の得益の疾く滅するは是れ陽春の謂いか。浄土の往生の久しく存するは、是れ巴人の謂いいか。

答えて曰く、諸教の修行は理深解微にして、今時難証の故に速滅の道理所難の謂いに任す。但だし浄教の利物、偏増なるに至

(55) 法然『選択集』(『昭法全』三二六～二六七)。

(56) 宗密『大方広円覚修多羅了義経略疏』(正蔵三・五二四中)。

りては夫の赫日皓月の蒼天に照耀するは是れ貴くして長久なり。朝菌蟪蛄(ちょうきんけいこ)の季月を逾(こ)えざるは、迺(すなわ)ち卑にして短速なり。若し爾らば、浄教は巴歌なるが故に、天下皆な和して百世万代に流通すとは謂うこと莫れ。又た解して曰く、思益に準ずるに云く、劫波尽くるの時は池河先ず涸き、巨海後に竭く。仏法衰るの日は権法先ず滅し、実教後に存すと。若し之を以て之を観れば、聖道の諸経の先滅するは是れ権乗か。浄土の一教の後に存するは乃ち真実か。学者商量せよ。凡そ法滅百歳の悪時に於て、直ちに二種生死の煩籠を解脱することは唯だ是れ我が弥陀実教の不共の別徳なることを。請い問う、曰く、『十輪』と『悲華』とに同じく万年の後三灰の時の施作仏事の相を説くと雖も、只だ是れ種熟にして脱益に非ざるのみ。矧や又た十歳の時中に於て彼等の諸経は先ず滅し、浄土の一教は後まで存すと。以て比類と為るに足らざる者をや。外書に言えること有り。月は粉壁に望んで弥(いよいよ)白く、灯は紗籠に入りて更(いよいよ)紅なりと。学者、知んぬべし。若し、澆季の朱愚の為に聖道の諸行を説かば、海鳥、九韶を聴きて死し、水魚陸地

に煦して亡びん者か。慎むべし、慎むべし。『倶舎論』の偈に曰く、[57]

再生汝今盛位に過ぐ。衰に至りて将に琰魔王に近づかんとす。前路に往かんと欲するに、資糧無く中間に住せんと求むるに所止なしと。

『経』に曰く、[58]

其の仏の本願力は名を聞きて往生せんと欲せば、皆な悉く彼国に到りて自ら不退転に致ると。

南無阿弥陀仏。

三時不代勝 第二十三

夫れ、季布か、一諾の千両の金より重きは、是れ不変の故なり。十八公の梢の貞木の名を得るは亦た不改の故なり。爰に聖道の諸行は三時代謝して今時証理し難し。然る所以は、一に、大聖、双林の春霞に隠れたまえて已に三千祀を送れるに由るが故に。

二に、所証の真理、沖寂にして能証の中智微薄なるに由るが故

(57)『倶舎論』(正蔵二九・四五中)。
(58)『無量寿経』(浄全一・二一)。

なり。

吾が浄土の教行は、全く三学に依らず、偏に一声を勤修す。故を以て法に三時代謝の失無く、機に定慧闕減の憂い無し。其の道理文証等、先後の諸章に広く之を引くが如し。再び載すること能わず。学人自看せよ。

問て曰く、夫れ三時代謝の道理は広く釈尊の遺法に通ず。若し然らば、豈に浄教独り然らざらんや。

答て曰く、善いかな斯の問い。多く利益あらん。仁者、宜く伶倫が聡耳を開き、顔子が慜心を借りて、諦聴善思せよ。且く一二を挙げて、仁者の迷を搴げん。夫れ、円蓋西に転ずと雖も、日月は東流し、南斗は随い運べども北極は移らず。冬天は尽く殺れるも松栢は彫まず。陰気水を凍らせども潮酒は氷らず。火日は物を焼けども布鼠中に遊び、水能く人を溺れさせども竜鼈内に游ぶ。此れを以て之を観れば同じき者ありと云うと雖も亦た和せざる者有り。彼に準じ此れを思うに、設い時機濁濫なりと雖も、胡ぞ即詣の巨益なからんや。

問て云く、三字尊号の末法三千の間を利し、及以び法滅十載の時を益することは只だ三冬の松栢の彫まざるが如く、是れ天然の道理か。将た別に其の由致あるか。

答て曰く、此に二の因由有り。一に曰く、弥陀の本誓は広く三学無分の根機を済うに由るが故に。二に曰く、釈尊の慈哀特り六字尊号の妙行を留るに由るが故に。斯の二義を具するに由りて唯だ念仏の一法のみ善能く末代の群類を利するのみ。如来説きて言く。是の日已に過ぐ。命、随て減少す。猶し羊を牽て彼の屠所に詣るに漸漸に死に近づき逃げ避る所無きが如しと。経[59]に曰く「命終の時に臨みで、合掌叉手して南無阿弥陀仏と称し、仏名を称るが故に、即ち往生することを得」と。

南無阿弥陀仏。

執著解脱勝 第二十四

夫れ、世間有漏の著相は、是れ分段輪廻の繁業。出世無漏の法愛は、亦た、変易生死の因惑なり。遺教[60]に曰く、「世間の縛著は、

(59)『観経』(浄全一・四九)。

衆苦に没す。譬えば、老象の泥に溺れて自ら出ること能わざるが如し」已上と。然るに今、浄土修行の義相を案ずるに、世俗の著楽は弥陀慈尊の厭悪したまわざる所。夫れ牢固の執心は、牟尼薄伽の激励を垂れたまう攸なり。皂白高卑、誰れか帰せざらんものか。

問う。いかなる経文有り、いかなる解釈有りてか大いに執著を誡めて生死輪転の大障礙なりと為るや。

答う。『法華』に増上慢の四衆、不軽大士を毀謗して千劫に阿鼻地獄に於て大苦悩を受るの相を説きて云く。「時に諸の四衆、法に計著す」[61]「時の四部の衆は著法の者」等[62]と。亦た、同第二に云く。

深く世楽に著して慧心有ること無し。三界は安きこと無きこと猶し火宅の如し。衆苦充満して甚だ怖畏すべし。常に生老病死の憂患有り。是の如き等の火熾然として息まず已上と。[63]

亦た、同第一に曰く、

衆生は諸根鈍にして楽に著し癡に盲しいられたり。斯くの如き等の類をば云何んが度すべき。[64]乃至深く五欲に著せるこ

(60) 世親造、真諦訳『遺教経論』（正蔵二六・二八八上）
(61) 『法華経』（正蔵九・五一中）。
(62) 『法華経』（正蔵九・一四下）。
(63) 『法華経』（正蔵九・一四下）。
(64) 『法華経』（正蔵九・九下）。

と、牛の尾を愛するが如し。貪愛を以て自蔽し盲瞑して所見無し。大勢の仏と及び断苦の法とを求めず已上と。[65]

亦た曰く、

堅く五欲に著して癡愛の故に悩を生ず。諸欲の因縁を以て三悪道に墜堕し六趣の中に輪廻して備さに諸々の苦毒を受く。至乃 衆苦に逼迫せられて邪見の稠林に入る。至乃 深く虚妄の法に著して、堅く受けて捨てしむべからず。我慢にして自ら矜高(キョウコウ)し、諂曲して心実ならず。千万億劫に於て仏の名字を聞かず、亦た正法を聞かず。是の如きの人は度し難し已上と。[66]

亦た『守護国界経』[67]に曰く、

或は煩悩の能く解脱の与に以て因縁となる有り。実体を観るが故に、或は解脱の能く煩悩の与に以て因縁と為ること有り。執著を生ずるの故に已上と。

亦た、『大日経』[68]に曰く、「無始生死の愚童凡夫は我名と我有とに執著して、無量の我分を分別す」已上と。又た曰く、「若し、蘊等に於て離著を発起して、当に聚沫浮泡、芭蕉陽焔幻等を観察して解

(65)『法華経』(正蔵九・九中)。
(66)『法華経』(正蔵九・八中)。
(67)『守護国界経』(正蔵一九・五四七中)。
(68)『大日経』(正蔵一八・二上)。

脱を得べし」上已と。[69] 啻円密の諸経の中に、著相を簡びて生死墜堕の業因と為るのみにあらず。亦た、南北諸宗の高祖等、同じく真俗の執著を悪みて、以て輪廻の大障と為り。且く法華円宗大師の云く。「未だ得ざる者の為に中を執して惑を生ず。故に無諦を須ゆ。実得の者には有り、戯論の者には無し上已」と。[70]　亦た云く。「法は通ずと雖も深く執すれば凡見と成る。喜びて愛著あれば妨障する所多し上已」と。[71] 亦た、荊渓尊者の云く。「始め迦羅自り終り、円著に至るまで、並びに初教の為に破せられずということ無し上已と。[72]『法華玄義』に曰く、「若し、伏断せる者は順道法愛を因と為し、無明を縁と為して変易土に生ず」上已と。[73] 亦た、南山大師の『帰敬儀』[74]に曰く、「竊に聞く、泥洹の法城には入るに多門あり。万行殊りと雖も、捨著に宗帰す」上已と。

亦た空宗三論の高祖の云く、

苦海に廻流するは住著を源と為し、彼岸に超然することは無得を本と為す。[75] 無住無著は経論の大旨、有依有得は衆病の根元なりと。[76] 上已

(69)『大日経』(正蔵一八・二下)。
(70) 智顗『法華玄義』(正蔵三三・七〇五中)。
(71) 出典未詳。ただし、前半部分は湛然『法華玄義釈籤』(正蔵三三・八二一上)にあり。
(72) 湛然『法華玄義釈籤』(正蔵三三・八五四上～中)。
(73) 智顗『法華玄義』(正蔵三三・六九五上)。
(74) 道宣『釈門帰敬儀』(正蔵四五・八六一中～下)。
(75)『維摩義疏』(正蔵三八・九〇九中)、『法華遊意』(正蔵三四・六六四上)。
(76)『三論玄義』(正蔵四五・七上)。

亦た法相中宗の祖師の云く、[77]「若し実に諸識の唯たるべき有りと執せば、既に是れ所執なり。亦た除遣すべし」上已と。

亦た有処に曰く、[78]「無礙法に貪著せば、是の人は仏道を去ること遠し。若し空を得ること有る者は、終に戒を破せず」上已と。

夫れ衆典に執著を悪むこと是れ且く千なり。諸師の法愛を簡ぶこと亦た万端なり。恒沙の墨翰も記し難く、竹葦の白麻も載せがたき者か。学者、知らんと欲せば之ゆいて看よ。曰く、敢て問う。曰く、『菩薩処胎経』に曰く、[79]

或いは菩薩摩訶薩有り。初発意従り乃至成仏まで執心一向にして若干の想い無く、嗔く、怒無く、願楽して、無量寿仏の国に生ぜんと欲す。至乃億千万衆の、時に一人有りて阿弥陀仏の国に生ず。何を以ての故に。皆な懈慢にして執心牢固ならざるに由るなりと。上已

四祖感師、之れを受けて云く、[80]是に知んぬ。雑修の者を執心不牢の人と為す。故に懈慢国に生ず。正しく『処胎経』の文と相当せり。若し、雑修せずして専ら此の業を行ぜば、此れ即ち執心牢

(77) 基『般若波羅蜜多心経幽賛』（正蔵三三・五二七上）、基『大乗法苑義林章』（正蔵四五・二五八下）。

(78) 『摩訶止観』（正蔵四六・三〇一上）に同文あり。

(79) 『菩薩処胎経』（正蔵一二・一〇二八上）。

(80) 『群疑論』（浄全六・四九下）。

固にして定んで極楽国に生ず。妙に『随願往生経』の旨に符(かな)えりと。上已

亦た宗家大師の云く、「生を願ずること何為(なんそれぞ)切なる。正しく楽窮まり無きが為なり」上已と。(81)

亦た曰く、「浄土無生の解脱を貪せざる障り」上已と。(82)

亦た瑛師の『修証義』に曰く、「彼は遣蕩を須い、此れは取著を須ゆ」と。上已

問うて曰く、何んが爾るや。

答えて曰く、外書に言えること有り。賁皷密(くわし)くして響を含み、竜笛透きて音を発すと。是れは即ち時と処と大いに別に、機と益と甚だ殊なる故か。若し爾らば、孰れの深著世楽の輩か帰仰せざらんや。何れの法愛貪理の彙いか憑頼せざらんや。行者、心を留めよ。行者、心を留めよ。夫れ古に曰く、軽肥流水を看ては則ち電幻の歎き忽に起り、支離懸鶉を見ては則ち因果の哀れみ息まず。目に触れて我を勧む。誰れか風を係らんと。経に曰く、(83)

但々至心に声を絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏

(81) 善導『往生礼讃』(浄全四・三六八上)。
(82) 善導『法事讃』(浄全四・一二下)。
(83) 『観経』(浄全一、五〇)。

と称す。仏名を称するが故に念念の中に於て八十億劫の生死の罪を除いて、一念の頃の如くに即ち往生を得と。

南無阿弥陀仏。

行徳遮悪勝 第二十五

夫れ、梨勤醍醐は即ち純薬の霊徳のみを備え、砒霜班猫は必ず毒薬の二用を具せり。修法の得失、其れ然らざらんや。抑々仏法の中に功少うして益の速なるは、陀羅尼章句に過ぎたるは無し。所以に一字含千理の霊徳を即身証法如の勢力を備え、一持秘密咒の功用を増息敬調の効験を具せり。然るに遮那円教の二宗は、尊徳維高して過が多く、宝号醍醐の一行は妙用最深して失無し。其の徳高と言わば、不起干座三摩地現前の妙徳なり。其の失多と言わば巫祝に近うして他の寿福を祈るの過失なり。又た尊号の霊用実に深しと言わば、為得大利無上功徳の妙用有ればなり。行体に失無しと言わば、悕求名位虚受信施の過失無ければなり。抑々此れ等の得失は、皆な其の行体に約して以て言うことを為す。全く

機根の得失には関わらず。卓識の学者、自ら商量せよ。且く『大宋高僧伝』の中、金剛智三蔵系に云う。[84]

五部曼拏羅の法は鬼物を摂取し、必ず童男処女に附麗して疾を去け、祆を除くこと也た絶易なり。近世の人、是を用いて身口の利を図るに、乃ち微験寡うして率むね時の為に慢どらる。吁なるかな、正法醨薄して一にここに至ると。上已

又た禅林の観師、聖道の行体に名位の過失を招くことを傷歎して云わく、[85]

真言止観の行は道幽にして迷い易く、三論法相の教は理奥うして悟り難し。勇猛精進の者にあらずんば何ぞ之れを修せん。聡明利智の者にあらずんば、誰か之を学せん。朝家簡定して其の賞を賜い、学徒競望して其の欲を増す。三密の行に暗くして忝く遍照の位に登り、毀戒の質を飾りて誤りて持律の職に居り、実に世間の仮名は智者の厭う所なりと。上已

又た、吾が大師、念仏以外の諸行の過失を判じて云わく、[86]

貪瞋諸見煩悩来りて間断するが故に、慚愧懺悔の心有ること無

(84) 『宋高僧伝』（正蔵五〇・七一二上）。
(85) 永観『往生拾因』（浄全一五・三九四上）。
(86) 法然『選択集』（『昭法全』三七一）に同様の文章有り。

きが故に、心に軽慢を生じ業行を作すと雖も、常に名利と相応するが故にと。上已

又た、観師、念仏一行の行徳に名利虚受を離れたることを喜悦して、名利虚受を離れたることを云わく、(87)

今、念仏宗に至りては、行ずる所は仏号、行住坐臥を妨げず。期する所は極楽、道俗貴賤を簡ばず。衆生罪重けれども一念に能く滅し、弥陀願深ければ十念に往生す。公家賞せざれば自ら名位の欲を離れたり。檀那を祈らざれば亦た虚受の罪も無しと。上已

又た、高祖大師、念仏の妙行の行体の徳を歎じて云わく、(88)

貪瞋諸見煩悩、来りて間断せざるが故に、慚愧懺悔の心有るが故に、心に尊教を生じて名利と相応せざるが故にと。上已

大師の高判と云い、古徳の詳勘と云い、同じく二行の得失を挙げて、以て行者の用心を勧誡す。有識の人、自ら勘判せよ。夫れ、望みを安養に繁ぎて、勤を余行に営むは、譬ば、方を慕いて罔を学び、飛ぶことを愛して泳ぎを好むが似如くに相似たり。又た、

(87) 永観『往生拾因』（浄全一五・三九四上）。
(88) 善導『往生礼讃』（浄全四・三五七上）。

轅を北にして楚に適わんと欲するが如く、豈に尅果することを得べけんや。抑々聖道の学者の浄土の捷径を知らざるは、夫の壌夫が偏えに天感を知りて皇道を知らず。蒯通(かいつう)が唯々韓信を知りて漢高を知らざるが若し。若し知りて之を修せずんば、其の咎宛も五刑に同じきものか。智者自量せよ。止観密行の人等、問う。曰く、豈に向きに言わざるや。其の行体に約して得失を判じて全く行人に依らずとは。夫れ浄土の行者の名利を悕求するは、是れ行人の失にして行体の失にはあらず。聖道の学者の名利を遠離するは迺ち修者の得にして、行体の徳にはあらず。若し行の失に拘牽せられざる遮那の行人は即ち当に乃至一生或は成正覚すべし。若し行の得に住持せざる念仏の行者は亦た内懐虚仮外現賢善すべし。人の過と行の失と卓識の学者自ら批判商量せよ。時に密行の人、服膺して去りぬ。

請い問う。曰く、法華遮那の行者は、無明塵労、即是菩提、無集可断、陰入皆如、無苦可捨と観ずるが故に。初心始行の者は多くは貪瞋諸見煩悩来間するならん。夫れ設い、三楽に誇ると雖も、

四悪の楚毒免れ難く、設い仙室に入ると雖も、万歳の椿寿尽きんこと必せり。『観経』に云わく、[89]「極重の悪人は他の方便無し。唯々弥陀を称すれば極楽に生ずることを得」と。

南無阿弥陀仏。

一代遍勧勝 第二十六

夫れ記小久成は是れ如来出世の本懐と雖も、之れを説きたまうこと只八箇年。三無差別は是れ十方母駄の仏慧と雖も之れを宣べたまうこと僅かに三七日なり。爰に吾が浄教は然らず。且く一大蔵中、諸大乗経を見るに、啻正依三部の中に別意弘願の玄旨を宜揚するのみに匪ず。初めは寂滅道場の華厳に、普賢自ら面見彼仏の廻向を陳べ、終りは鷲峯山頂の法華に如来親り即往安楽の記莂を授けたまえり。其の中間に於て亦た処処に之れを説いて休まざるは唯々是れ浄土の一教のみ。故に宗頤禅師の云く、[90]

是れを以て了義大乗に浄土を指帰せずということ無し。前賢後生自他皆な往生を願う。凡そ人を度することを得んと欲せ

(89) 源信『往生要集』（浄全一五・一二九上）。

(90) 出典未詳。ただし王日休『龍舒浄土文』（正蔵四七・二八四中～下）に同文あり。

ば、先ず須く自度すべき故なり。已上

又た天台国師の云く、[91]「但し専ら弥陀を以て法門の主と為す」と。荊谿尊者の云く、[92]「諸教に讃うる所は多く弥陀に在り。故に西方を以て一準と為す」已上と。

又た真歇の清了禅師の『浄土説』に云く、[93]

仏仏手を授け、祖祖相伝すること唯(ただただ)此の一事のみにして更に余事無し。釈迦老子、世に住すること七十九歳、説法は三百余会、聞法悟道の者、勝計すべからず。一大蔵教、五千三百四十八巻、覆視すべきなり。然るに所説の法は機に随いて一説を授くるのみ。独り西方浄土の教えに於ては、言うこと于再于三(ふたたび みたび)に至りて諄諄として屢(しばしば)説きて已まざるに至るは、浄土を以て超凡入聖の捷径と為ざることを得んや。故に『無量寿経』『華厳』『法華』凡て数十部に皆な慇懃に西方を指授すること、悲母の赤子を諭ゆるが若し已上と。

請い問う。曰く、夫れ六八弘誓の要行は是れ則ち弥陀慈父別意の秘術、釈尊悲母済凡の本懐に由りて然なり。凡て経文炳焉とし

(91) 智顗『魔訶止観』（正蔵四六・一二中）。
(92) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一八二下）。
(93) 出典未詳。

て解釈底を尽くす。孰れか爾らずと言わんや。古に曰く、山の下(ふもと)にて山の上を望むに、初めは攀(よ)ずべからざることを疑う。誰か知る、中に路有りて盤折にして厳巓(ごんてん)に通ぜんとは、此れは斯れ難行の諸経の中に易往の捷径有るを謂うか。

諸い問う。曰く、自力の衆典の中に於て他力引接の益を示すこと必せり。文無きは略なり。宗師、経を引きて曰く、(94)

人間悤悤として衆務を営む。年命の日夜に去ることを覚らず。灯の風中に滅せんこと期し難きが如し。忙忙たる六道定趣無し。未だ解脱して苦海を出ることを得ず。云何ぞ安然として驚懼せざらん。各(おのおの)聞け。強健有力の時、自策自励して常住を求めよと。

南無阿弥陀仏。

依経直説勝 第二十七

夫れ言の貴きは是れ天子の綸言、文の卑きは乃ち臣下の往来なり。聖主天中天の直説と、鬼神諸天仙の加説と、其の優劣如何。

(94) 出典未詳。

且く『蘇悉地経』に曰く、[95]

三部に各々三等の真言有り。いわゆる聖者の説と、諸天の説と、諸地居天の説と、是れを三部と為す。聖者説とは謂く仏、菩薩、声聞、縁覚説を是れを聖者の真言と為す。諸天説とは浄居天従り乃至三十三天の諸天の所説、是れを諸天の真言と為すなり。地居天説とは、夜叉、羅刹、阿修羅、竜従り、迦楼羅、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅、部多卑舎、遮鳩槃茶等の所説、是れを地居天の真言と為す已上と。

『大日経の疏』第七に曰く、

大いに真言を判ずるに略して五種有り。謂く、如来の説と或いは菩薩金剛の説、或いは二乗の説、或いは諸天の説、或いは地居天の説なり。謂く竜鳥修羅の類なり。又た前の三種をば通じて聖者の真言となづけ、第四をば諸天衆の真言となづけ、第五をば地居者の真言となづく。亦た通して諸神の真言と名づくべし。聖者の真言に亦た阿字或いは囉字等を説くが如きは、彼の諸世天乃至地居鬼神等も亦た之を説くなり。彼

(95)『蘇悉地経』（正蔵一八・六三九中）。

の相に何の殊異かある。阿闍梨の言く、若し仏菩薩の所説は則ち一字の中に於て無量の義を具す。且く略して之を言わば、阿字に自ら三義あり。謂く不生の義、空の義、有の義なり。[96] 至乃若し諸菩薩の真言に阿字有るは当に知るべし。各々自所通達法界門の中に於て一切の義を具す。普門法界の中に於て一切の義を具するにはあらず。若し二乗の真言に阿字あらば当に知るべし。只だ尽無生智、寂滅涅槃に約して不生の義を明かす。若し梵天所説の真言に阿字あらば是れ出離五欲覚観不生に約して義を明す。若し帝釈護世の真言に阿字あらば是れ十不善道及び灰横の不生に約して義を明す。余は皆な類を以て知るべし已上と。[97]

亦た『智度論』に云く、[98]

仏説に五種の人説有り。一には仏自口の説、二には仏弟子の説、三には仙人の説、四には諸天の説、五には化人の説已上と。夫れ真言秘密の諸教の最頂なるや。猶お天衆竜鳥等これを宜揚す。華厳法華の衆聖の仏慧なるや。亦た菩薩声聞等、之れを説領

(96) 『大日経疏』（正蔵三九・六四九上～中）。
(97) 『大日経疏』（正蔵三九・六四九上）。
(98) 『大智度論』（正蔵二五・六六中）。

す。しかのみならず二士二王十羅刹等、妙経読誦の者を護らんが為に諸仏密語の神咒を説き、又た『維摩』の所説、『般若』の転教等、皆な是れ聖弟子の説ならん。吾が正依三部の妙典に於ては然らず。唯々純一仏語にして全く四説を雑えず。故に『玄文』に云く、(99)

凡そ諸経の起説五種を過ぎず、一には仏説、二には聖弟子の説、三には天仙の説、四には鬼神の説、五には変化の説なり。

今此の『観経』は是れ仏の自説なり已上と。

是れ則ち輪王帳中の娯楽は是れ国内万民の能く知る所にあらず。弥陀別願の玄旨は是れ因位浅智の能く宣べる所にあらざる故なり。亦た『疏』の第四に曰く、(100)

又た一切の行者、但々能く此の経に依て深く信行する者は必ず衆生を誤たず。何を以ての故に。仏は是れ満足大悲の人なるが故に。実語なるが故に。仏を除いて已還は智行未だ満ず、其の学地に在りて、由を正習二障有りて未だ除かず、果願未だ円ならず。此等の凡聖は、たとえ諸仏の教意を測量すれど

(99) 善導『観経疏』(浄全二・三下)。
(100) 善導『観経疏』(浄全二・五六下～五七上)。

も、未だ決了すること能わず。平章有りと雖も要ず須く仏証を請いて定とすべし。若し仏意に称(かな)えば即ち印可して如是如是と言いたまう。若し仏意に可(かなわ)ざれば即ち汝等が所説は是の義不如是と言い玉う。印せざる者は即ち無記、無利、無益の語に同じ。仏の印可したまう者は即ち仏の正教に随順す。若し仏の所有の言説は即ち是れ正教、正義、正行、正解、正業、正智なり。若しくは多、若しくは少、衆べて菩薩人天等に問いて其の是非を定めたまわず。若し仏の所説は即ち是れ了教、菩薩等の説は尽く不了教と名づく。応に知るべし。是の故に今時仰ぎて一切有縁の往生人等に勧む。唯だ深く仏語を信じて専注奉行すべし。菩薩等の不相応の教を信用して以て疑礙を為して惑を抱き自ら迷いて往生の大益を廃失すべからず(已上)と。

夫れ意れば今斯の『観経』は是れ功用一期に高く、化儀余典に勝れたり。何が故ぞ高勝なりや。是れ則ち覚王の勅言のみにして法臣の浅談にあらざる所以なり。智人知んぬべし。啻々上茅城中

の密化の独り如来の直説なるのみにあらず。又た鷲峯会上、逝多林中、両会『阿弥陀経』に同じく、是れ薄伽至尊随自の直説なり。亦た只々正依三部の妙典のみ釈迦大我の自説なるのみにあらず。又た次依傍依の諸大乗経の中に於て、西方往生の教行を明かす。衆文は皆な是れ仏口所説の金言にして全く弟子加説の法門にあらず。あゝ貴き哉。夫れ民下百千言、国王の一言にしかず、万億の伊蘭樹、豈に一葉の栴檀に等しからんや。智人知んぬべし。若し爾らば、一切の学者等、当に浄土の墳籍を尊重し珍敬して闇夜に明澄に遇い、貧家の奇物を得たるが如くにすべし。抑々仏語、四の説を加えたること摩尼と鷲石と棚を一にするが如く、牛酬と驢乳と器を同じうするに似たり。経典の唯仏説なるは、檀林の楞峯に連なるが似(ごと)く、明玉の崑岳に耀けるが如し。亦た細人麁人二たり。倶に過ちを犯す。過の辺に従て説けば倶に麁人と名づくと言える、之を詳勘するの意思で知んぬべし。抑々委く三部妙典の首尾を披きて文字偈言の頭数を明むるに若し偈を以て之を言えば七百六十六偈あり。若し字を以て之を言えば二万四千五百五言有

り。然るに其の中に唯だ六字尊号の霊徳のみを説きて、全く余行他門の功能を揚げず。智人見つべし。

請い問うて曰く、法身の大士、和光の諸天等、秘密の神咒を説くことは猶お是れ三学式内の通談なるが故なり。三乗の浅智、四悪の凡類等、本願の玄極を宣べざることは是れ迺ち三学格外の別益なる故なり。二教同聴すと雖も説不説の異あることは、式内格外の謂か。曰く、敢て問うて曰く、三部四軸は是れ正依なり。『般舟』『皷音』は是れ次依なり。『法華尊勝』は是れ傍依なり。夫れ頭に衰霜屢々降りて、既に八獄の国に隣りなり。面に老波頻るに重りて漸く阿防の責を招く。あゝ陽九百六之災禍を離れて三輩二転の福楽に誇らんこと全く他にあらず。只々是れ口業散称の大功力なるのみ。南無阿弥陀仏。

超世本願勝 第二十八

夫れ五百大願の中には有識索多を無勝報土に引接するの別願無く、十二上願の間に愚童薩埵を瑠璃報国に来迎するの誓願無し。

唯だ菩提薩埵を以て当機となし、地住の高位を以て弟子とせり。吾が浄土は然らず。凡夫引接の宏願を発して以て愚童索多を導き声聞無数の大誓を立てて、以て有識薩埵を化す。是れ則ち他方の報土に卓犖せる不共の報土にして余仏の報身に超絶せる酬因の報身なればなり。若し爾らば、孰れの異生か憑を別願に繫げざらんや。何の二乗が生を安養にもとめざらんや。夫れ仰頼本願の行者は縦い煩悩の劫賊の為に侵さるると雖も、尊号摩尼の大蔵有るが故に、更に孤独貧乏の患無し。自力の行人は是に反す。二道修行の不同、智人自ら知れ。

古に云く、

夫れ月満てば則ち虧く。物盛んなれば則ち衰うるは、天地の常なり。進むことを知て退くことを知らず、久く富貴に乗りて、禍積りて崇を為すと。夫れ洪鐘の響も推せざれば鏘(な)らず、玉琴の調べも弾かざれば声せず。然るに今吾等行者能く洪鐘を扣ち、善く玉琴を皷つ。豈に鳴らざらんや。焉んぞ声(ひか)ざらんや。

南無阿弥陀仏。

称名音声勝 第二十九

夫れ禽類の音（コエ）の殊に勝れたるは、是れ頻伽鵜随の音（コエ）なり。称仏の声の奇妙なるは乃ち南無弥陀の声なり。然れば則ち格外称仏の音声は式内誦経の音に卓犖し、別願口業の妙音は明妃持誦の声に超絶せり。『双巻』に曰く、[101]

其れ彼の仏の名号を聞くこと得ること有りて、歓喜踊躍して乃至一念せんに、当に知るべし此の人大利を得たりと為す。則ち是れ無上の功徳を具足す。

『観経』に曰く、[102]

声をして絶えず、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に念念の中に於て八十億劫の生死の罪をのぞく。乃至一念の頃（あいだ）の如くに即ち極楽世界に往生することを得と。已上

『阿弥陀経』に曰く、[103]

(101)『無量寿経』（浄全一・三五）。
(102)『観経』（浄全一・五〇）。
(103)『阿弥陀経』「念仏多善根」の文。『龍舒浄土文』（浄全六・八四四下）。

専ら名号を持せば名を称する以ての故に諸罪消滅す。即ち是れ多善根福徳の因縁なり、至乃心顛倒せずして即ち往生することを得已上と。

鼻祖鸞公上士の曰く、[104]

此の十念は無上の信心依止して、阿弥陀如来の方便荘厳、真実清浄無量功徳の名号に依りて生ず。譬ば人有りて毒箭に中あてられて筋を截り、骨を破らるるに、滅除薬の皷を聞けば、即ち箭出でて毒除くがごとし。豈に彼の箭深く毒励ければ、皷の音声を聴けども、箭を抜き毒を去ること能わずと言うことを得べけんや。已上

観師の曰く、[105]

凡夫の行者、煩悩の胎中にして一たび南無阿弥陀仏と称す。此の一音声の余の音声に勝れたること頻伽卵にして声衆鳥に優れたるが如し已上と。

密行の人之を難じて曰く、「真言不思議、観誦無明除と宣べたるが故に」と。[106]猶お是れ三学の式内なり。「令声不絶具足十念」と説

(104) 曇鸞『往生論註』（浄全一・二三六下）。
(105) 永観『往生拾因』（浄全一五・三七二下）。
(106) 出典未詳。

くが故に。全く是れ無分の格外なり。学者商量せよ。

夫れ持名の行人は肥壮多力の人の能く深泥を出でて資粮を貯積するの彙いの即ち嶮難を度るが如し。聖道の修者は是に反す。智人知んぬべし。

大師、経を引て曰く、[107]

人生て精進せざれば、喩えば樹の根無きが若し。華を採て日中に置かば能く幾時か鮮なることを得ん。人命も亦た是の如し。無常須臾の間なり。諸の行道の衆を勧む。勤修して乃ち真に至れ、と。

夫れ不死の薬を蓬莪に求めんと欲すれば、遥かに百万里の波濤を度り、延齢の方を崑崙に尋ねんと欲すれば遠く千万里の碧嶺を隔たる。爰に不死の霊薬あり。無量寿の佳名是れなり。亦た延歯の秘方あり、王舎城の大教是れなり。南無阿弥陀仏。

浄土十勝箋節論巻上　坤中終

(107) 善導『往生礼讃』（浄全四・三六〇下）。